

主 文
原判決を破棄する。
被告人は無罪。

理 由

本件控訴の趣意は、弁護士鳥山忠雄、同副島武之助連名提出の控訴趣意書記載のとおりであるから、これを引用する。

同控訴趣意第一点（イ）について。

原審における鑑定人A、同B作成の各鑑定書、証人C、同D、同Eの各証言によれば、所論のごとく坑内において岩石に発破孔（深さ約四・五尺）を穿ち火薬（通常ダイナマイト）を装填して発破を行う場合、岩盤の強度、穿孔の順序、位置、角度等の不適、装薬量の寡少その他の原因により、装填火薬は爆発したが岩盤爆破の効果が十分でなく、発破孔がその儘の状態において、或はその孔口が一部破砕した状態において残存する場合を、所謂「鉢を打つ」、「鉄砲を打つ」又は「空発」と称し、この場合においては残存する発破孔（即ち鉢孔）内に火薬が残留しないのを通例とするが、極めて稀有な例外的事例として火薬の一部が不爆に終つて残留する場合があります、しかも「鉢を打つ」と火薬の一部残留との間には必ずしも因果関係が存するものでないことが認められる。

又原判決がその理由において、「当時同箇所は被告人の前番者発破係員Fが発破作業を実施し、その折装填ダイナマイトの一部が不爆に終り爆破不成功に帰し、その穿孔（鉢孔）を残置した儘云々と」判示していることも所論のとおりである。しかし、原判決挙示の証拠によれば右判示のとおり、装填ダイナマイトの一部が不爆に終つていた事実は極めて明らかであり、只被告人において当時該事実を認識していたか否かが被告人の採つた爾後の処置について過失の有無を判断する上に重要な意義を有するものであるが、判文を熟読すれば原判決は被告人が当時右一部不爆の事実を察知していたものと認定したのではなく、被告人に有利な判断をしていることが認められるから、原判決に所論の如き事実誤認は存しない。論旨は理由がない。

同控訴趣意第一点（ロ）について。

よつて記録を精査するに、原審における証人G（公判及び公判準備期日共）、同H同Cの各証言、被告人の司法警察員に対する供述調書によれば、被告人の指揮、監督下にある仕操夫（先山）Iが本件事故を惹起した鉢孔附近に穿孔するに際しては、該鉢孔を点検した上これと交錯しないよう約一〇糎を隔てた箇所に穿孔ドリルをかけて作業した事実が窺われる。原判決挙示にかかるIの司法警察員に対する供述調書によつては未だ以て論旨摘示の如き原判決事実を認め難いのみならず、該調書は前後に矛盾撞着があり又経験則に副わないところがあつて前掲各証拠に対比し措信し難い。然るに原審が該供述調書によりIがドリルを同作業箇所の盤際右端の鉢孔に繰り入れた事実を認定したのは証拠の判断を誤り判決に影響を及ぼすべき事実を誤認したものにして原判決は破棄を免れない。論旨は理由がある。

同控訴趣意第二点（イ）（ロ）及び第三点（二）について、

石炭鉱山保安規則第一九〇条は「不発」と題してその第一項に、装填された火薬類が点火後爆発しないとき、又はその爆発の確認が困難であるときは、当該発破係員は左の各号（危険防止の処置）の規定を守らなければならない旨規定し、同第一九一条第一項は、装填された火薬類が不発のときは、当該発破係員は第一、二号、第四、五号の方法により不発火薬類を回収する処置を構じなければならない言及び同第二第三項は、不発火薬類を回収することが出来ない場合に採るべき処置について詳細規定している、従つて右各条項を比較検討（要旨第一）すれば、右第一九一条第一項所定の「火薬類の不発」とは、即ち装填された火薬類が点火後全く爆発しないで（要旨第一）その儘残留しているとき、又は爆音その他の状況よりして爆発したのを確認することが困難であるため、装填された火薬類の全部又は一部が爆発しないで残留することにつき相当の蓋然性を有するときと解するを相当とする。ところが所謂「鉢を打つた」場合においては上來說示のごとく発破孔即ち鉢孔は残存しているけれども、装填された火薬類は爆発して孔内に残留しないのを通例とし、極めて稀有の例外的事例として火薬の一部残留することがあるに過ぎないのであつて、この場合においては通常一部火薬の残留の蓋然性は極めて微少と謂うべきであるから、所謂「鉢を打つた」場合は同規則第一九一条第一項の「火薬類の不発」に該当するものでなく、従つて同条各項の適用外にあるものと解するのが相当である。尤も発破係員は発破後においては同規則第一九二条第一項第一号に従い危険の有無につき鉢孔を検査すべく、その結果万一火薬の一部が残留し又はこれを推測すべき情

かとの疑が多分に存する事実が認められ、鉢孔内にその儘残留せる火薬に穿孔ドリルが接触した事実は未だ以て確認し難い。以上認め得べき各事実に徴すれば、被告人は鉢孔のある岩盤に穿孔するに際し前叙の如き業務上必要な注意義務を怠つたものと速断し難く、記録を精査するも被告人に前記任意義務の懈怠あることを確認すべき資料は存しない。然るに原審が挙示の証拠により原判示事実を認定して被告人に業務上の注意義務を怠つた過失があるものと断定したのは、法令の解釈、適用を誤り、且つ事実認定を誤つた違法があるものと謂うべく、しかも該違法は判決に影響を及ぼすこと明らかであるから、原判決は破棄を免れない。論旨は理由がある。

そこで刑事訴訟法第三九七条第一項に則り原判決を破棄し、同法第四〇〇条但書に従い更に判決する。

本件公訴事実の要旨は、被告人は長崎県西彼杵郡 a 町所在 J 鉱業所に発破係員として勤務して居る者なるところ、昭和二九年一月一四日午前一一時一〇分頃担当箇所である同鉱業所一坑口内西卸第五ポケット風道昇において坑員を指揮監督して発破の業務に従事するに際し、同箇所には被告人の前番の発破係員である F が不完全な爆破に終つた穿孔があり、危険であることを右鉱業所技師 L から聞知して居たのに拘らず、危険なきものと輕信して同所においてドリルを以て穿孔作業に従事中の坑員に対し指揮監督をなさなかつた業務上の不注意により作業中のドリルの先端を石不完全爆破に因る残留ダイナマイトに接触せしめて爆発させ、因つて同作業に従事中の坑員 K に対し両眼、前額部に全治四週間を要する爆傷を、I に対し前額部、右肘部等に全治一三日間を要する挫傷を、H に対し右前腕部に全治二日間を要する擦過傷を、G に対し前額部に全治一〇日間を要する挫傷を蒙らしめたと謂うに在るが、論旨第二点（ハ）及び第三点（イ）（ロ）（ハ）（ホ）に対する判断において説明したとおり被告人に過失を認むべき確証がなく、結局本件は犯罪の証明がないものとして刑事訴訟法第三三六条に則り無罪の言渡をなすべきものとする。

よつて主文のとおり判決する。

（裁判長裁判官 藤井亮 裁判官 中村莊十郎 裁判官 尾崎力男）